

玉祐山

1 金窓寺の開山

金窓寺六世祖門曇庭大和尚
享保十七壬子九月吉日

【コラム 玉窓妙金法尼の石祠をさがして】

[illegible]

2023年7月23日、諏訪形誌活用委員会主催のウォーキングイベント「諏訪形誌を歩く」の開催にあたって、ちょうどこのイベントで「石祠」があると思われる場所の近くを通ることから、「石祠の場所がわからなくなっている」というコラムを載せました。すると、この記事を読んでくださった地域の方から「その石祠の場所なら知っている」という連絡をいただきました。さっそく7月26日、知らせてくださった方に案内していただいて、この祠を訪ねてみました。祠は権現山の枯れた沢の奥にひっそりとたたずんでいました。右の写真は2023年の「玉窓妙金法尼の石祠」です。



- 34 -

【コラム 玉窓妙金法尼の石祠と東山・三本松（石尊山）・権現山を歩く】

I「諏訪形周辺古墳群」の「舟窪古墳群」の項や前のコラム「玉窓妙金法尼の石祠」でも触れましたが、この舟窪古墳群や玉窓妙金法尼の石祠を含む「東山」の地籍はハイキングコースとしてたいへん魅力的なエリアです。以前はかなりひどい藪で立ち入るのがたいへんでしたが、「ナチュラリストクラブ・うえだ」の皆さんなどが整備してくださり、たいへん歩きやすくなっています。この里山整備には「諏訪形まちづくり協議会」も協力して活動しています。

里からも特徴的な松の木がよく見える「石尊山」通称「三本松」には石祠もあり、諏訪神社委員会が毎年参拝し管理していますが、それ以外は訪れる人も少ないピークになっていました。けれども2023年、ナチュラリストクラブ・うえだの皆さんと諏訪形まちづくり協議会の皆さんが協力して雑木の処理などを行った結果、上田一帯が見渡せるすばらしいピークになりました。

「石尊山」と西隣の「権現山」（注：諏訪形で「権現山」と呼んでいるのは、この「権現山」から北東にのびている尾根の末端のようです）、舟窪古墳群、さらには船窪地籍の南側にあたる「東山・下之郷山」を巡るハイキングコースは整備が行きとどいていて歩きやすく、すばらしいハイキングコースとなっています。



東山トレッキングマップ（ナチュラリストクラブ・うえだ）

2 玉窓妙金法尼と金窓寺寺宝の「笈」

金窓寺の開山とされる、玉窓妙金法尼とはどんな女性だったのでしょうか？記録からは「武田家に関係がある人」ということしかわかっていません。

金窓寺には寺宝として、この玉窓妙金法尼が持参したと言われる、「笈（高さ84cm、幅70cm）」が残っています。「笈」とは「おい」とも呼ばれ、行脚僧や修験者などが仏具や衣装、食器などを入れて背負うものです。寺伝では、この笈は玉窓妙金法尼が持参したものとされています。笈は前面に金銅板で五重塔や輪宝をあしらうなど、凝った技法が用いられており、また、内側には釈迦三尊や眷属（けんそく＝脇仏）などの仏像が祀られています。



金窓寺宝の「笈」（左）と笈内の仏像

また、内側には釈迦三尊や眷属（けんそく＝脇仏）などの仏像が祀られています。

この「笈」について飯田市美術館に問い合わせをしたところ、「他に類例がありませんのではっきりとは判らないが、16～17世紀ころ作られたものではないか。いずれにせよ貴重なものであると思われる」との回答を得ています。また、この笈には成澤寛経（1797年～1868年 上田地域における郷土史の開祖ともされる人物）による、以下の説明文が書かれています。

古笈を入れた木箱の墨書 平成5年7月25日 小池記（●は不明な文字）

古笈一箇者信濃国小県郡諏訪形村
金窓寺之所什而其例寄世俗●●●
最為壯麗●按之垂五百年前之物也
寺伝云此境係干天文上上田原之戦
之街因以為機山武田公遺物聞●部
其故予今熟視其何謂木背有記文回

伯州之住宏覺并押出字見焉然而紀年
漫滅只四月廿五日之字隱●但存己
実可惜也 其餘孟浪無得可讀又再按
後人凶女所為塗沫●予功德向來愈久
破碎更修造外厨以寄之云上●
一片老婆心身炎

為百合主人

原 昌吉 講

注：「為百合主人」以下の9文字は異筆

維時文久2年歲次壬戌孟夏吉祥日

城東 原街 成沢 寛経

権現山金窓禅寺 現住祖門代

* 墨書解読 筆者が解読したもので凡そこんな意味でわらないかと思う。

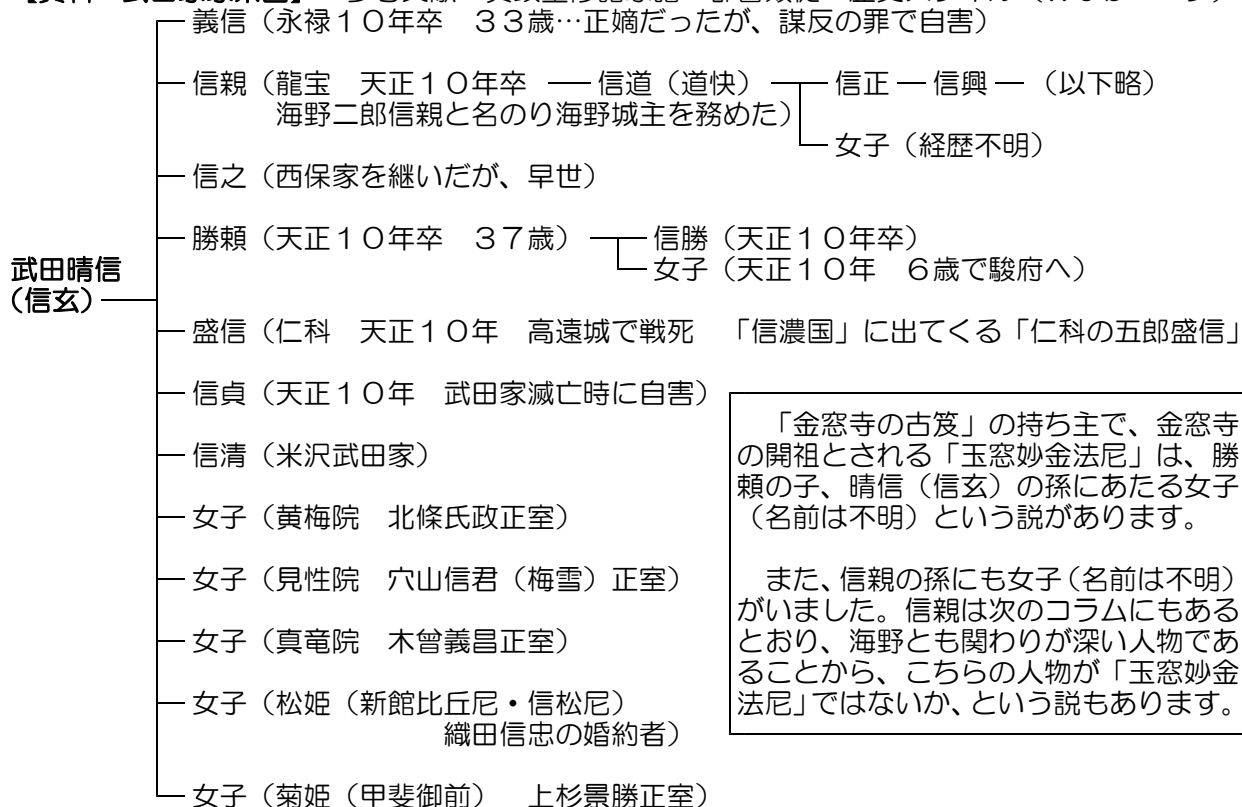
『古笈一箇信濃国小県郡諏訪形村金窓寺の什なり、世俗にはその例がなく最も壯麗で五百年前の物也と寺伝は云う。天文上上田原之合戦の衛の為の機山武田公の遺物と聞く其れ故私今其のなんであるかを熟視するに、木背に記文あり伯州に住んでいる宏覺並びに押出字が見えるが、然し紀年漫滅ただ四月廿五日の字隠れあり実に惜しいことである。其の他孟老可讀出来ず又後人の為にも塗沫をして、これからも功德向來久しいので破碎箇所外厨の修造を上に乗せ申す、一片老婆心ながら』

これは文久2年（1862）城東原町に住む成沢寛経氏が、金窓寺第15世祖門和尚に書き送ったものである。

注：仮名遣いなどは原文のまま

この金窓寺にある笈とよく似たものが武田家の地元、山梨県甲府市にある萬年山大泉寺にも残っています。萬年山大泉寺は、金窓寺と同様曹洞宗の寺院で、武田信玄の父、武田信虎の菩提寺です。武田3代の霊廟が置かれている寺でもあります。

【資料 武田家家系図】 参考文献：貫政重修諸家譜・郡書類従・歴史スタイル（Webページ）



甲府市の大泉寺には、武田信虎のものと武田晴信（信玄）のものとされる、2つの笈が残されています。玉窓妙金法尼が金窓寺に持参したとされる笈は、大泉寺に残っている笈とほぼ同等の立派なもので

す。このことから、この笈を持参した女性は、武田家の本流につながるような武将の関係者であったと考えられます。また、かなり大きく立派な笈であることから、女性がひとりで持参したとは考えにくく、複数の人の手によって運ばれてきたのではないかと考えられます。

また、この女性が庵を構えた場所が通称「権現山」だったことも、諏訪形周辺と武田信玄とのつながりを思わせます。「権現山」にほど近い、現在「倉升山」と呼ばれている山の旧称は「陣場山」で、上田原合戦の時に武田方が陣地を置いた場所です。

金窓寺の境内には、歴代住職の墓所があります。玉窓妙金法尼の位牌（亡くなった当時のものではない）も残されており、「天照院殿玉窓妙金大庵主」と記されていますが、墓所についてはわかりません。

【コラム 上田市周辺と武田氏・玉窓妙金法尼】

玉窓妙金法尼と上田地域との関わりについては前述のとおりです。上田地域や諏訪形周辺は武田氏とのつながりが数多く確認できる地域であり、女性が「権現山」に庵を開いたことも偶然とは言えないように思えます。ここで、もう少し武田氏・玉窓妙金法尼と上田地域のつながりについて見ていながら、玉窓妙金法尼がこの地に庵を構えたわけについても考えてみたいと思います。

天文10（1541）年、武田信虎（信玄の父）は「海野平の合戦」で海野氏を破り、東信濃に足がかりを作りました。海野氏は「本海野」「海野宿」や「海野町」などで名が残るとおり、現在の東御市を中心に勢力を持っていた一族です。

海野氏に代わって武田信玄の次男、信親がこの海野領と海野城を受け継ぎ、「海野二郎信親」と名のりました。信親は生来目を患っていた盲目の半僧半俗の武将で、海野の地を心から好みました。海野での生活の中では、信親について「龍宝」「龍寶」「龍芳」「竜宝」「竜芳」などの文字が見られます。



武田（海野二郎）信虎



武田信玄

天文17年2月14日（新暦では1548年3月23日）、武田晴信（信玄）と村上義清が戦った「上田原合戦」がありました。この「上田原合戦」は武田信玄が初めて敗れた戦として、歴史に名を残しています。前述のとおり、この合戦の時に武田側の本陣が置かれた場所が「陣場山（現在の倉升山）」で、後に玉窓妙金法尼が庵を構えた「権現山」のすぐ西隣の場所です。

その後、真田幸隆による砥石城攻略などがあり、天文19（1550）年には『武田晴信宛行状』で真田幸隆に対して「諏訪形300貫文」を与えることが約束されました。このあたりの経緯については『諏訪形誌』をご参照ください。このようなこともあって、天正10（1582）年に武田家が滅びた後も、上田地域は武田氏に敵対する勢力はなく、武田氏に連なる人々にとって安全な場所だったことが、玉窓妙金法尼がこの地に庵を構えたことと関係がありそうです。

3 旧金窓寺はどこにあったのか

慶長元（1596）年4月に開かれたとされる「権現山金窓寺」が、諏訪形のどの場所にあったのかははっきりわかりません。

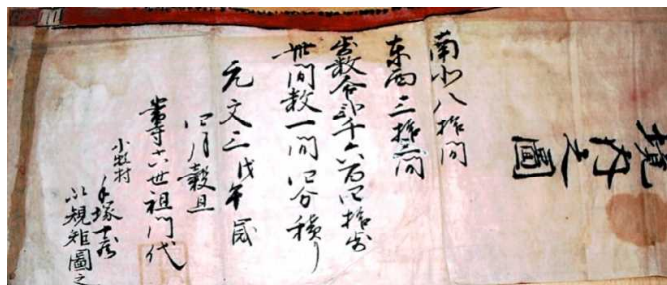
金窓寺開山とされる慶長元（1596）年から100年ほど後、宝永3（1706）年に作られた、いわゆる『宝永の差し出し帳』によると、「諏訪形には明神宮（現在の諏訪神社）、寺（金窓寺）、荒神堂（現在の荒神宮）、観音堂、権現社、飯縄社、十王堂、薬師堂、山神2社（現在の上ノ山の神、下ノ山の神）、神明（須川）がある」と記されていますが、それぞれの場所については明記されていないため、はっきりしません。

諏訪形の字堂村地籍（現在の公民館北東側一帯）に「寺屋敷」と呼ばれている場所があります。この「寺屋敷」という地名は、この場所に寺院があったことを伺わせます。また、「寺屋敷」の周辺にあたる細川明典さん宅庭先（右写真）や細川僖良さん宅の北側には、五輪塔の一部とみられる石（「残欠」と呼ばれます）も残っていて、旧金窓寺はこのあたりにあったのではないかと推測されます。なお、これらの残欠は見学させていただくことができます。



以上のようなことから、現在の場所に移転する前の旧金窓寺は、寺屋敷地籍にあったのではないかと推測されます。また、平成19（2007）年発行の『上田市誌 別巻5 図で見る街や村のうつりかわり』には、「この場所（寺屋敷地籍）には観音堂があった」との記述も見られます。これが金窓寺のことではないか、という説もありますが、この「観音堂」は明治時代まで残っていた観音堂をさすものと思われます。

その後、金窓寺は現在の場所に移転するわけですが、いつ、どのような理由で移転したのかは明らかではありませんが、金窓寺に残されている元文3（1738）年の日付が記された絵図面から、この当時、すでに現在地に移っていたことがわかります。



金窓寺の移転に関して、1999（平成11）年発行の『上田仏教会50周年記念誌』には、「寺屋敷にあった金窓寺が明和年間（1764～1772）に火災に遭い、その後現在の場所に移転した」と記されています。この「明和年間」は、絵図面が残された元文3（1738）年よりも30年ほど後のことです。そうすると、この「元文3（1738）年の絵図面」は現在の場所に移る前、「寺屋敷」にあったころの金窓寺の絵図面で、火災によって金窓寺は移転した、ということなのでしょう。また、もしそうでないとすると、金窓寺はいつ、どのように理由で現在の場所に移ったのでしょうか？まだ謎は多く残ったままです。



ここまで述べてきたとおり、「旧金窓寺はどこにあったのか」「金窓寺はいつ、どのような理由で現在の場所に移したのか」ははっきりしません。

しかし、手がかりはあります。上記の「絵図面」には、金窓寺の敷地についての記載があります。それによると、「境内は南北80間、東西32間」となっています。メートル法に換算すると、南北約140m、東西約60mとなります。国土地理院の地図をもとにして現在の金窓寺の敷地を測ってみると、南北は約150mです。「東西」についてはどの場所を測るかによってだいぶ差が出ますが、概ね50m程度と見ることができます。

一方、「寺屋敷」の広さはほぼ一辺が40m程度の正方形と見ることができ、

「絵図面」に示された金窓寺は、現在の場所に建つ金窓寺のものである可能性が高い

と思われる。これは、「明和年間に火災に遭って移転した」とされている『上田仏教会50周年記念誌』の内容と矛盾することになります。

以下、かなり大胆な仮説です。この『上田仏教会50周年記念誌』に記載されている「明和年間（1764～1772）」は「元和年間（1615～1624）」または「天和年間（1681～1684）」の誤りではないか、という考えです。転記の際に間違っ、ということは経験的にもそれほど稀なこととは思えません。そして、金窓寺の移転がこの時期なら、元文3（1738）年に描かれた「絵図面」が、現在の場所にある金窓寺である、ということ矛盾なく説明することができます。この考えはあくまでも推測でしかありません。しかし、こんな身近な金窓寺のことについても、実はよくわかっていないことは多いのだ、ということです。

江戸時代に現在の場所に建てられた金窓寺の堂宇は老朽化が目立っていました。そこで、平成11（1999）年8月、開創400年の記念事業に併せて、本堂庫裏の新築が計画されました。檀徒など関係

者の同意を得て、平成16（2004）年に工事が開始され、翌年7月本堂上棟式が行われました。平成20（2008）年10月5日には系列の寺院や檀徒、工事関係者などが多くの人たちが参列して、落慶法要が営まれました。新しくなった本堂は平屋建て、約90坪（約300平方メートル）、庫裏は約200坪（約660平方メートル）で、総工事費は1億3524万円でした。

【コラム 金窓寺開山に関する疑問（異説）】

金窓寺について、『取調達仕候書上（1881（明治14）年）』という史料に以下のような記述があることがわかりました。ただ、あちこち調べたのですが、この『取調達仕候書上』の原本が見当たりません。この疑問については今後の解明が待たれます。

東西三十一間一尺五寸、南北二十五間、面積二反六畝二十二歩。曹洞宗海野村、興善寺末寺なり。村の南方、山麓にあり。

寺伝に、古来観音堂にて、今堂村と称する地にありしに、元禄の頃、武田氏の餘●、女子某此地に住し祖先の為一字を建立し、海野村興善寺七世宗達を開山とし、玉祐山金窓寺と改称す。宝暦年中、権現山と改称す。維新の際舊に復し、玉祐山と称す。

『取調達仕候書上』の記載を要約すると以下のとおりです。

○堂村にあった「観音堂」が現在の金窓寺の基になった。
○女性（名前は不詳）が元禄年間（1688～1704）、興善寺から僧（海野村興善寺七世宗達）を招いて開山した。

この部分について『諏訪形誌』では次のように述べています。

慶長元（1596）年4月、武田家一門の菩提供養のため、東御市の興善寺7世通山全達師を拝請して「権現山金窓寺」を開山しました。

両者の記載を比較すると、次のようになります。

『諏訪形誌』の記載	『取調達仕候書上』の記載
○開山したのは女性 ・名前は玉窓妙金法尼 ・武田家と関わりの深い女性 ○開山は慶長元（1596）年4月 ・興善寺7世通山全達師 ○『宝永の差出帳』の「寺」が金窓寺 ○東西32間、南北80間 ・金窓寺に残る「元文3年の絵図面」による	○開山したのは女性 ・名前は不明 ・武田氏の餘● ○開山は元禄年間（1688～1704） ・興善寺7世宗達 ○堂村にあった観音堂が金窓寺 ○東西31間1尺5寸、南北25間

※注：『諏訪形誌』には金窓寺の広さについての記述はありませんが、基本的に「元文3年の絵図面」の記述を採用しているため、同じ資料から引用しました。

両者の記述についての考察

- ・武田家と関わりのある女性が建立した、とされる部分は共通しています。
- ・開山は海野の興善寺第7代ということは同じです。ただ、名前が異なっています。興善寺に問い合わせたところ、第7代住職の名は通山全達師とのこと。また、『歴史研究海野（Web版）』にも「興善寺第7代住職 通山全達師」という記載があることから、『諏訪形誌』の記述が正しいものと思われます。
- ・開山の時期が100年ほど異なっています。
- ・『取調達仕候書上』の記載「古来観音堂にて、今、堂村と称する地にあり」という記載が正しいなら、『宝永の差出帳』の「観音堂」が「金窓寺の前身」ということになると思われます。しかし、別記のとおり堂村には「観音堂」があったことがわかっており、この記載は正しくないものと思われます。また、『取調達仕候書上』の記載が正しいとすると、『宝永の差出帳』の「金窓寺」は何を指すのかが不明となってしまいます。
- ・広さが全く異なります。広さに関しては「元文3年の絵図面」の方が現在の金窓寺の実態に合うように思われます。ただし、両者の東西はほぼ一致しており、南北についてはどの範囲を寺地とするのかによって大きな差が出る可能性があります。また、『取調達仕候書上』の記載「東西31間1尺5寸、南北25間」は寺屋敷地籍に建物があつたとされる場所の広さ

とほぼ一致しています。

- 以上のことから、『取調達仕候書上』の記載には問題が多いと考えられます。

本稿を一旦書き終えた後、『郷土を知ろう 諏訪形史跡めぐり（金子素人・平成9（1997）年）』という資料が見つかりました（窪田和人さん蔵）。

この資料によると

○金窓寺を開いたのは甲州武田公の末裔（姓名不詳）の一女。

○上記の女性が興善寺（東御市）7世通山全達大和尚を開山として「玉祐山金窓寺」を開山。

注：権現山金窓寺ではないか？

○開山は慶長元（1596）年3月8日。

○この女性は後には出家し、玉窓妙金法尼と名乗って西（東）山に庵を建てて住んだ。

○この女性は慶長18（1613）年11月27日に亡くなっている（出典不明）。

ということで、ほぼ『諏訪形誌』の記述と整合性がとれていることがわかります。なお、同資料の「権現社」の項には「（寺伝によると）玉窓妙金法尼は武田信玄の妹」とありますが、そのように書かれた根拠はわかりません。玉窓妙金法尼は『諏訪形誌』や本稿で採用している「武田家にゆかりの女性」ぐらいのところが妥当ではないか、と思います。

また、『諏訪形誌』では、「玉窓妙金法尼の石祠」は「玉窓妙金法尼は最初に庵を建てて住んだ場所」としていますが、金子素人さんの資料では「玉窓妙金法尼が晩年隠居した場所」とされています。これについて考察するなら、玉窓妙金法尼はかなり大きな「笈」を持ってきているわけで、これを女性ひとりで運んできたと考えるのは不自然です。とするならば、何人かはわかりませんが、上田の地に到着した玉窓妙金法尼の一行が、山中の小さな庵に住んだというのは不自然であるようにも思われ、「隠居後の庵」という説には説得力があるように思います。

上記の『取調達仕候書上』には「堂村にあった観音堂が金窓寺」と書かれています。この「観音堂」については議論のあるところでしたが、金子さんの資料によると明治6（1873）年の「廃寺・廃堂令」によって観音堂は廃堂となり、その跡地には「諏訪形学校（知仁学校トモ称シ字堂村696番地観音堂跡地二開校）」と称ス（出典：中村御黨覚書帳）とあり、また、そこにあった観音像は金窓寺に移された（つまり、その時期までは観音堂は存在した）、とされています。これを『宝永の差出帳』の記述と見比べたとき、『宝永の差出帳』には「金窓寺」と「観音堂」が別々に記載されていることから、『取調達仕候書上』にある「堂村にあった観音堂が金窓寺」という記述は誤りであると考えられます。なお、堂村の観音堂にあった観音像は行方不明です。

また、堂村地区にお住まいの古老、細川嘉蔵さんのお話では「細川僖良さん宅南隣の宮入さんのお宅は「お経堂」と呼ばれていた」とのことです。このお宅の入口の作りは普通と家とはちがって、上がり框が1m近くもあった、とのこと。この「経堂」とは一般的には寺院で教典と納めておく建物を指す言葉ですから、この「経堂」は観音堂に関わるものであったのではないかと考えられます。この建物はつい最近まで残っていたようですが、現在住んでおられる方は「先代なら何か知っていたかも知れないが、残念ながらよくわからない」と話してくださいました。

なお、「観音堂にあった観音像は金窓寺に移された」とも記録されているものの、その像は行方不明のようです。

【コラム 諏訪形での葬儀と廻り場・棺台】

死者の魂が後戻りすることを避けるためのまじないとして、「廻り場」を使った葬儀が行われていました。野辺送りの途中で葬列が廻り場に着くと、導師の僧侶が読経をする中で、棺を棺台に載せて左回りに3回半回してから、導師が木製の小さな鍬をとって、右手で3回大きく円を描いた後、大きな声で「カッ（喝）」と言ってこの鍬を棺に投げつけて、死者の霊魂が迷わず悟りの道に行くことができるよう引導を渡しました。その後、会葬者は葬列を組んで墓地へと向かいまし





た。埋葬後は来た道とは別の道をたどって帰りました。このような儀式は明治時代の中期か末ごろまで行われていたようです。

ところで、諏訪形には3か所の「廻り場」がありました。「花の木地籍（県営水道浄水場の少し北側）」と「中沢地籍（諏訪神社参道の入口付近）」、中沢地区の共同墓地内に「廻り場」があったことがわかっています。

中沢地籍にあった「棺台」は現在、金窓寺の山門附近に移転されています（左写真手前のまるい石）。この台は直径68cm、高さ24cmの石で、北沢伴康さんの調査記録では「寛政6（1794）年寅」の銘があるとされています。なお、窪田善雄さんによる最近の調査では摩耗が進んでおり、「寛政」は読めるものの「6年寅」の文字は読み取れないとのことでした。

4 金窓寺の仏像

金窓寺の本尊は阿弥陀如来です（右写真）。禅宗の寺では、例外もありますが、一般的には本尊は釈迦牟尼仏であることが多く、阿弥陀如来は浄土宗の寺の主尊となっていることが一般的です。金窓寺の本尊が釈迦牟尼仏ではなく、阿弥陀如来である理由ははっきりしません。

本尊 阿弥陀如来像
（本堂中央仏壇）



なお前述のとおり、小懸郡史など既刊の書物には「金窓寺の本尊は釈迦牟尼仏である」と書かれているものが多く見られますが、誤りです。また、『諏訪形誌』の記載も「釈迦牟尼仏」となっており、改める必要があります。



本堂の南には「位牌堂」が付属していますが、その中央仏壇に釈迦如来が安置されています（左写真）。これは平成20（2008）年に本堂が落成したおり、信者の方から寄進されたものです。両手は説法する形を表すもので、「施無畏・与願印」と称します。

金窓寺には3代ほど前の住職のころまで、旧本堂北東の一部に薬師堂があり、参拝も行われていたようですが、今はその仏事もなくなってしまいました。このことを機縁として檀家信徒の浄財も募り、平成30（2018）年、本堂東側仏壇上に、新たに薬師三尊像を安置することとなりました。



薬師三尊像



『郷土を知ろう 諏訪形の史跡めぐり』
に掲載されている薬師如来像

参考文献 窪田善雄 金窓寺の「ミホトケ」たち
（『諏訪形誌』web版）

【コラム 行方不明の仏像】

『郷土を知ろう 諏訪形史跡めぐり（金子素人・平成9（1997）年）』には「旧薬師堂内に高さ51cm、底幅15cmで両手が欠けた、木造の薬師如来像があったが、堂が老朽化して壊れたときに本堂に移された」と記載されています。また、不鮮明ながら、この薬師如来像の写真も掲載されています（左上の写真参照）。しかし、この薬師如来像は現在、行方不明となってしまっているようです。

【コラム 金窓寺の名僧たち】

1 継天岸大和尚



金窓寺9世、継天岸大和尚は金窓寺から岩門にある大日堂の住職になったという記録があります。現在、大日堂跡には継天岸大和尚の墓碑（左の写真）が残っています。この墓碑には「寛政二庚戌（1789年）八月廿九日示寂」とあり、江戸時代中期から後期にかけての時代に亡くなっていることがわかります。「前総持」との刻印から、総持寺（現横浜市）の僧もつとめていたのではないかと推測されます。

岩門大日堂は江戸時代後期、活文禅師（安永4（1775）年～弘化2（1845）年）が寺子屋を開いた場所です。活文禅師は和漢蘭の三分野に通暁しており、ここ「多聞庵」で中国語（清国語）、蘭学（天文学）、詩歌、書、彫刻、一弦琴など多種多様な学問を一人で教えていました。そして、そのすべてが当時の最高水準だったといわれています。

活文の名声は近郷近在はもとより、遠くの村々にまでおよび、門弟は千余人と言われます。門弟の中には、佐久間象山をはじめ、高井鴻山、山寺常山らがいます。また、活文が毘沙門堂に移った後に赤松小三郎も教えを受けています。このように、活文禅師は幕末おおいに活躍した人々をを世に送り出した偉大な教育者と言えます。

2 崑山璞紋和尚

金窓寺12世に、崑山璞紋（こんざんぼくもん）という和尚さんがいました。高井郡福島村（現在の須坂市）の出身で、姓は花井、号は崑山で、通夢道人とも呼ばれました。この璞紋和尚のもとに文化11（1814）年、大門四泊（現小県郡長和町四泊）の名主内田安良太から「地元、大門にある慈福寺の住職になってほしい」という要請がありました。和尚はこの要請を受けて、四泊の慈福寺へ移っています（現在は無住）。右の写真は現在（2023年8月）の慈福寺です。



崑山璞紋和尚は書に精通していて、特に中国の法帖を手本として日夜精進しました。「天満宮近くの湧き水「通夢清水」を使い、毎日3合（540cc）の墨をすって書を習った」と言われます。その書を求めて近郷近在から多くの人たちが集まり、教えを請う門弟たちも多くいました。



加賀百万石の大名行列がこの地を通った時には、殿様が「田舎にもこんなすばらしい書家がいるのか」と感銘を受け、村人に和尚のことを尋ねたという話も伝えられています。また、時の懸令川上氏が璞紋の書に感銘を受け、「樵獨庵」の額（左写真）を贈りました。

和尚の絶筆となったとされている五反のぼり（長さ10m、幅1.4m）「惟民迪吉康（「民を思い、吉康を導く」という意味）」は現在、長和町の指定文化財にもなっています。なおこの言葉も、璞紋が深く学んだ中国の古典から採られたものです。また、古町上宿や和田上町には和尚の書による馬頭観音石碑も残されています。



崑山璞紋和尚は嘉永3（1850）年、74歳で亡くなりました。長和町慈福寺の本堂裏には璞紋の墓碑（右写真）があります。また、慈福寺の境内には門弟たちによって建てられた筆塚（左写真）も残っています。

なお、崑山璞紋が四泊慈福寺に移った後、正鐘活眼大和尚が金窓寺13世住職となりました。



参考文献：『長門町誌（平成元（1989）年）』